

2012年のオペラ界

～全般の展望と主な劇場、団体の活動～

関根 礼子

大きな被害をもたらした東日本大震災の翌年にあたる2012年は、損壊したホールなどが徐々に復旧、再開するなかで、中止や延期になっていた公演のいくつかが開催にこぎつけ、国内のオペラの活動状況はおおむね回復したようにみえる。とはいえ被災地の復興はまだまだ先が長い。うえ、建屋が爆発した原子力発電所ではいまだに放射性物質の流出が続いていて事故収束のめどさえたっていない。そうしたなか、海外の音楽家らは来日することの是非や意義についてさまざまに考え、多様な行動をとった。日本人の場合も音楽やオペラをやることの意味について、これまで以上に真剣に考えざるをえない状況だったろう。音楽家自身による復興支援の活動が各地で活発に行われたのみならず、企画内容や上演そのものにも大変真摯な取り組みが多数みられた。

その結果だろうか、画期的といえるまでに見事な成果をあげた公演が相次いだ。たとえばエディタ・グルベローヴァが日本での最後のオペラ出演にすると宣言したウィーン国立歌劇場の《アンナ・ボレーナ》はめったにないほどの高揚感に包まれていたし、現代オペラの公演が高水準で折り重なるように行われ、ライマンの《メデア》、クセナキス《オレスティア》、ブリテン《ピーター・グライムズ》、オネゲル《火刑台上のジャンヌ・ダルク》などは、一つひとつが大変にテンションの高い演奏であった。新しいレパートリーの開拓にも熱気があり、シャルパンティエの《病は気から》、プロコフィエフ《修道院での結婚》などが異彩を放った。日本人歌手や内外の演出家の何人かは普段の水準を超える力

量を発揮して嬉しい驚きをもたらした。東京二期会の《パルジファル》、新国立劇場《沈黙》などはその例だろう。

こうした現象をみるとかなりの活況を呈したオペラ界だったといえるのだが、半面、国内の少なからざるオペラ団体の財政状況にはきわめて困難なものがあるのも無視できない。日本経済の低迷のなかで助成金や寄付金の不安定さや券売の不振などから未払い金や赤字が増え、財団を解散したり、団体の存在自体があやうくなっているところも散見される。こうした傾向は特に声楽家などのアーティストが自ら組織・運営してきた民間団体で、時代に即応したアートマネジメント不在のところにも多くみられる。公的助成の位置づけにしても好況感のあった一昔前とは状況が変わっており、オペラ団体の運営には一層の智恵と見識が求められている。

震災に話を戻すと、当時、東北と関東一円の劇場、地域の文化施設などが避難所や帰宅困難者の受け入れ場所として機能したという事実がある。想定外の対応だった施設もあったにせよ、これは文化活動の振興という面からも意外に重要なことではないだろうか。施設本来の「文化事業」でないとはいえ、人々の生活から遊離したところでは音楽もオペラも本来の力を持ちえない。非常の際には頼れる場所というイメージがあればこそ、住民は日ごろから劇場や文化会館などに関心を持つようにもなるだろう。

そうしたなかで6月、国会でいわゆる劇場法（劇場、音楽堂等の活性化に関する法律）が成立したことは、オペラ活動にとっても重要である。民間のオペラ団が運営に苦慮する

一方で、公的事業や官民共同の活動は各地で次々に成果をあげている。今後、団体と文化施設との協働関係をどう構築していくか、それぞれの地域の実情にみあった形で探究していったほしいと思う。

■ 新国立劇場

主催のシーズン公演は1月の《ラ・ボエーム》から12月の《セビリアの理髪師》まで9演目行われ、鑑賞教室と研修所の公演をあわせると、本格的な舞台公演はオペラパレスで全47回、中劇場で全8回、小劇場ゼロの合計で全55回行われた。この数は震災で中止公演があった前2011年と比べても9回の減となるが、理由は地域招聘とこどもオペラが行われなかった関係が大きい。両事業ともこの年はバレエで、地域招聘は神戸を拠点とする貞松・浜田バレエ団、こどもバレエは《シンデレラ》が開催された。

オペラの新しい企画として日中共同による《アイダ》がコンサート形式で上演され、北京公演も行われた。カヴァーキャストによる演奏会形式公演も引き続き開催されたほか、研修所でも小劇場で短縮版での公演を行うなど、簡易な上演形態による催しが定着してきた。これは制作費を削減せざるをえない財政状況のなか、国内各所でみられる昨今の傾向ではある。

シーズン公演9演目のうち、再演は6演目で、新制作は《沈黙》、《ローエングリン》、《ピーター・グライムズ》の3演目。再演がイタリアオペラの名作中心なのに比して、新制作は尾高芸術監督独自の見識と手腕が明確にうかがえるもので、それぞれに充実した大きな成果を得ることができた。尾高監督による体制は10月から3年目のサイクルに入り、震災の影響もようやく減ってきて、本来の特性が見えてきた。6月には2014年9月からの

芸術監督として飯守泰次郎が発表され、芸術参与に就任。任期後半に差し掛かった尾高監督の本領が今後どう発揮されるか、期待したい。

年間の公演を通じて新国立劇場合唱団は着実に歌唱能力を高めており、外部の公演にも複数参加して国内トップクラスのプロ合唱団としての地位を確立している。オーケストラは例年どおり1月から3月までのシーズン公演を東京交響楽団、それ以降は東京フィルハーモニー交響楽団が担当。バレエではオペラパレスでのシーズン公演5演目(全29回)のうち2月の《こうもり》のみ東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団、ほかはすべて東京フィルが担当した。東響、東京フィルとも覇気のある積極的な演奏で参加していると感じられることも何度かあり、期待を抱かせた。

1月は《ラ・ボエーム》の再演。2003年に(財)日本オペラ振興会 藤原歌劇団との共同制作でプレミアした栗國淳演出版で、2004年と2008年に再演されて4度目の公演。総じて安定した完成度の舞台だったなかで、特にマルチェッロ(アリス・アルギリス)の豊かな美声、ロドルフォ(ジミン・パク)のあふれ出る情念、児童合唱(TOKYO FM少年合唱団)の研ぎ澄まされた音色などが強いインパクトを与えた。

2月は中劇場で松村禎三作曲《沈黙》の新制作。この作品は1993年の初演以来、複数の団体で公演が繰り返され、そのつど完成度が高められるという素晴らしい上演史をたどってきた。新国立劇場でもこれまでシーズン公演(オペラパレス、2000年)と地域招聘(中劇場、2005年)で上演しており、今回は3度目。作曲者が2007年に他界してから作品そのものの改訂は行われていないわけだが、演奏や演出が一層深まって、これまでの集大成ともいえるべき大きな成果をみること

ができた。作品については、特定の宗教を超えた普遍性、充実した管弦楽、ドラマ構成的確さなどの長所がある半面、日本語レチタティーヴォの作曲法については必ずしも習熟しているとはいいがたい。ではあるのだが、大変わかりやすい演出(宮田慶子)のもと、内容の悲劇性を過度に強調せず、どこかに救いを感じさせる舞台になっていたことを筆者は歓迎する。歌手もおしなべて好演し、中劇場で無理なく聴かせることができた。2011年の《夕鶴》とあわせて、これが新国立劇場の日本オペラ上演だと胸を張っていえるだけの水準だったと思う。

3月は《さまよえるオランダ人》の再演。筆者の観劇した日(14日)、ダーラント役のディオゲネス・ランダスが体調不良で第2幕からカヴァーの長谷川顯に交代。やむを得ぬことではあるが、なぜかオランダ人役のエフゲニー・ニキティンも好調とはいいがたく、ゼンタ(ジェニファー・ウィルソン)が胸のすくように見事な高音を聴かすに至って、ようやく安堵。エリック(トミスラフ・ムツェック)の立派な声、舵手(望月哲也)の輝かしい声とあわせて、同夜の救いとなった。もう一つの問題は演出(マティアス・フォン・シュテークマン)の意図が適切に伝わってこないことで、これはプレミエの時から感じられ、再演でも改善されなかった。この演出家が6月の《ローエングリン》でみちがえるような舞台をみせたことを考えると、この演目では巧く実力が発揮しえなかったのだと思わざるをえない。

4月に再演されたマリオ・マルトーネ演出の《オテロ》は、場面をヴェネツィアに設定して舞台に大きく水を張った豪華なプロダクション。2009年プレミエで初めての再演。デズデーモナ(マリア・ルイジア・ボルシ)はみずみずしくもしっかりした歌唱と演技でオテロを純粹に心から愛しているいたいけな

若妻像を表現し、悲劇性を際立たせた。カッシオ(小原啓楼)、エミーリア(清水華澄)ら比較的若い世代の日本人歌手たちがアンサンブルを立派に務めたことも注目される。

同じく4月に再演された《ドン・ジョヴァンニ》は2008年プレミエで初めての再演。グリシャ・アサガロフの演出は一部に時代を超えた抽象的感觉を採り入れつつもスコアの流に忠実に従って、特に新しい読みは感じさせなかった。ドン・ジョヴァンニ(マリウシュ・クヴィエチエン)はかなり不遜な人物像に表現されていて、豊かな声と明晰な歌唱、しなやかな身ごなしでありながら、性的魅力には乏しく、二枚舌の「社会の敵」として色濃く印象づけられた。周囲の女も男たちも激しく怒っており、ドンナ・エルヴィーラ(ニコル・キャベル)をはじめとする外国人歌手たちがすこぶるドラマティックに歌い上げた怒りの猛烈さたるや半端ではない。地獄に堕ちていい気味だと納得させる結末で、これぞ18世紀のイメージだったかもしれない。レボレッロ(平野和)、騎士長(妻屋秀和)、マゼット(久保和範)ら日本人歌手もしっかりした演唱で脇を固めた。

なお、カヴァー歌手による演奏会形式公演が中劇場で1回行われ、与那城敬(ドン・ジョヴァンニ)、北川辰彦(レボレッロ)、佐藤康子(ドンナ・エルヴィーラ)、吉田珠代(ドンナ・アンナ)らが十分に歌いこなして気力みなぎる歌唱を聴かせた。今後の活躍が待たれる。

6月に新制作の《ローエングリン》。タイトルロールのクラウス・フロリアン・フォークトが、少しのかげりもなくまっすぐに届く豊かな声とニュアンスに富んだ表現力で大変見事な主役ぶりだったのをはじめ、歌手、合唱団、オーケストラすべてがペーター・シュナイダーの練達の指揮で充実した演奏を展開した。演出(マティアス・フォン・シュテ

クマン)は新鮮な感覚の舞台美術のもと、心理表現を深めることに成功。最終場面はやっと戻ってきた王子が一人舞台にぼつんと残されるという救いのないシーンで悲劇性を印象づけた。

シーズン合間の7月、日中共同制作の《アイダ》がコンサート形式で上演された。新国立劇場と北京の国家大劇院とは以前から劇場運営や制作技術などの面で交流をしてきており、その一環として共同制作が初めて実現したもの。歌手、合唱団は日中半々ずつ、指揮と管弦楽はそれぞれで、各2回ずつの公演である(中国公演は8月)。東京公演は広上淳一の指揮で東京フィルの演奏。音量のバランスが最適に按配されたステージで、特に素晴らしかったのがアイダの和慧(ヘー・ホイ)だ。滑らかな美声とダイナミックな歌唱力で人物像の内面を十分に歌いつくし、アイダが人間的にいかにも魅力的な人物かを納得させた。アムネリスの清水華澄も安定した実力を発揮して見事だった。一部譜面台を置き、カットされた部分も少くない演奏会形式だが、オペラ劇場同士の日中文化交流が第1歩を踏み出すことができたのは重要である。

10月、2012/2013 シーズンがブリテン《ピーター・グライムズ》の新制作でオープンした。文化庁芸術祭主催公演でもある。ウィリー・デッカー演出によるベルギー王立モネ劇場のプロダクション(1994年プレミエ)で、装置はごく少なく、衣裳も黒と赤の2色にほぼ統一されるなどスッキリとして鋭角的だ。演出は完成度が高く、個人と集団の対立の構図を暗く、鋭く描き出す。主人公ピーター・グライムズの武骨な人間像をスチュアート・スケルトンが迫力満点で歌い、エレンのスーザン・グリットンも立派。バルストロード船長(ジョナサン・サマーズ)の一筋縄でいかない含蓄の深さなど、主要キャ

ストに最高の配役が組まれた。リチャード・アームストロングの指揮で管弦楽(東京フィル)、合唱ともイギリスの寒い漁村の風土そのもののような清冽な響きを聴かせた。イギリス音楽に造詣の深い尾高芸術監督の力量で高水準の舞台を観劇できたことを喜ぶたい。この年、最も高い評価を受けたオペラ公演の一つだった。

11月に再演された《トスカ》は2000年のプレミエ以来、この劇場の代表的レパートリーとして定着しているもの。アントネッロ・マダウ＝ディアツ演出で川口直次のリアリスティックな美術が豪華で大層美しい。歌手に関しては特に熱狂させられるほどではなかったとはいえ、沼尻竜典の指揮のもと、安定した舞台運びで観劇することができた。

12月にかけて年内最後に公演されたのは、ヨーゼフ・E.ケップリンガー演出の《セビリアの理髪師》。2005年のプレミエ以来、2度目の再演である。悲劇が続いた後での数少ない喜劇オペラでもあり、芸達者の男性3歌手(フィガロ:ダリボール・イエニス、バルトロ:ブルーノ・プラティコ、伯爵:ルシアノ・ボテリヨ)が笑いをふりまいて年末を明るく締めくくった。

オペラ研修所は3月、中劇場でツェムリンスキー《フィレンツェの悲劇》とラヴェル《スペインの時》を上演。修了生(第12期)5人のうち4人が男性(バリトン3、バス1)であることから、特に男声の歌唱力がしっかりと発揮できる演目が選ばれたという。出演は第12期から14期までの研修生14人と賛助出演に修了生3人、歌なしの助演に演劇研修所の第5期生(修了生)11人も参加した。飯守泰次郎指揮、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団の演奏による本格的な公演で、歌手はそれぞれしっかりと舞台を務めていたようだが、筆者はあれこれ細かい趣向が満載の刺激的な演出(三浦安浩)に目

を奪われて、音楽面を十分堪能する余裕が持てなかった。装置や群衆をほぼ同一にして2作品の共通性を探った意図は分かるにせよ、演劇研修生の出番を確保するためか、さまざまな小芝居が羅列されることで、作品本来のドラマがかえって平坦化されてしまったのではないか。そうした中、最も啓発されたのは、《フィレンツェの悲劇》の終わり方である。プログラムの解説によると、各ステージごとに異なる終わり方が演出されるそうで、筆者の観劇した日は、夫婦が互いの魅力を確認しあった後、夫が妻を絞め殺すという、これはこれで納得できるものだった。ほかにも多様な結末が想像しうるわけで、《コシ・ファン・トゥッテ》の最終場面と同じように、演出次第で鑑賞後の印象が大きく異なる結果を招くに違いない。このほか7月に小劇場でオペラ試演会《コジ・ファン・トゥッテ》短縮版、9月には民間企業の支援によるガラ・コンサートなど、小規模の発表の場を年数回持った。

高校生のためのオペラ鑑賞教室は7月にオペラパレスで《ラ・ボエーム》を6回開催したほか、関西公演として尼崎市総合文化センターあましんアルカイックホールで10月に《愛の妙薬》を2回開催。関西では大阪フィルハーモニー交響楽団が出演した。シーズン公演と同じプロダクションだが、歌手には国内トップクラスが並び、筆者の観劇した《ラ・ボエーム》(17日)ではミミ(廣田美穂)、マルチェッロ(青山貴)らがしっかりした歌唱力で健闘。全キャストを日本人で固めると、海外勢が加わった舞台に比して全体に表現力の緻密さが強調されてくる。

■ (財) 日本オペラ振興会

藤原歌劇団は3月の都民芸術フェスティバルで《フィガロの結婚》、9月に《夢遊病の

女》を公演し、引き続きイタリアオペラの路線を進めた。《フィガロの結婚》ではアルベルト・ゼッダを指揮に迎えて、古典的様式感には抜群。管弦楽(東京フィルハーモニー交響楽団)はゼッダの指揮に熱意を込めて的確に応え、チェンバロ(小谷彩子)も喜劇精神を発揮して劇中何度か笑わせた。歌手のなかにはモーツァルトを歌いこなしている傾向も見られたものの、砂川涼子(伯爵夫人)のおおむね滑らかな美声、向野由美子(ケルビーノ)の完成度の高い歌唱力など、有望格も少なくない。舞台は費用の関係か、ほとんど何もない空間だったが、スクリーンの昇降や分割に工夫があり、全体の美的センスは優れていた。演出はマルコ・ガンディーニ。

モーツァルトよりもベルカントに習熟しているのが近年の藤原の歌手たちで、《夢遊病の女》ではベッリーニの流麗な旋律を見事に歌いこなして、ベテランから新進まで何人ものベルカント歌手が育っていることを印象づけた。なかでも抜群に光っていたのが、光岡暁恵(アミーナ)だ。透明感のある美声が高音から中音域まで滑らかにすべり、装飾歌唱などのテクニクも万全。的確にコントロールされた声で長いフレーズを余裕たっぷりに歌いこなす力量は最高レベルの素晴らしさだ。エルヴィーノの中井亮一も輝かしいコロラトゥーラで好演、ロドルフォ伯爵(デニス・ビシュニャ)の安定した低音、テレーザ(牧野真由美)のふくよかな声なども加わって、園田隆一郎の指揮のもと、美しい音楽を堪能させた。演出(岩田達宗)は作品本来のトラディショナルな路線を行くものだったが、最終場面に一工夫あり、リーザ(納富景子)とアレッシオ(前田進一郎)にもハッピーエンドが訪れることを示唆して明るく幕を閉じた。

日本オペラ協会が1月に東京公演をした池辺晋一郎《高野聖》は、2011年12月に金沢

と高岡で初演されたもの(前号のオペラ年鑑参照)。オペラ歌手育成部の第31期研究生による新人育成オペラアンサンブル公演が、3月、《フィガロの結婚》、ジョルダノ《聖母マリアの月》とドニゼッティ《リタ》で開かれた。(なお、日本オペラ振興会は4月より公益財団法人になった。)

■ (公財)東京二期会

前2011年4月にスタートした一連の創立60周年記念公演を継続、都民芸術フェスティバル参加の《ナブッコ》を2月に開催した後、5月の二期会ニューウェーブ・オペラ劇場《スペイン時間》《子どもと魔法》、7月の《カヴァレリア・ルスティカーナ》《パリアッチ》、9月の《パルジファル》、11月に日生劇場他との共同主催でライマン《メデア》と、常に何かしらの新しさを感じさせる意欲的な公演が続いた。一般の聴衆にとって蓋を開けてみないと何が出てくるか予測がつかないという捉えにくさは依然として残るものの、最近の良い意味での驚きをもたらすケースが多く、新しい表現を開拓しようとする先進的なエネルギーに彩られている。

《ナブッコ》での新鮮な驚きは、何といってもイタリアの若い指揮者、アンドレア・バッティストーニの登場だろう。まずは序曲で東京フィルハーモニー交響楽団から目の覚めるまでに精彩ある演奏を引き出して圧倒。劇中は歌がからむために完璧とはいかなかったものの、全幕を通してヴェルディの音楽の魅力をここまで満喫させてくれる指揮者は珍しい。その指揮のもと、新進や若手を加えた歌手、合唱は全般的に *p* や *pp* などが心をこめて美しく歌われた半面、イタリアオペラならではの旋律美をぐいぐいと盛り上げていく声の迫力には欠けがちだ。 *f* は出るのだから、 *mf* くらいの表現に一層の闊達さが欲しい。

とはいえ若手歌手の水準は上がっており、同会がオペラ歌手の育成に成果をあげていることは十分に実感された。

《カヴァレリア・ルスティカーナ》と《パリアッチ》は、2作とも現代感覚で作品を読み替えた演出(田尾下哲)に新しい試みや創意工夫が満載。情事や決闘のシーンを衆目監視のもとにおいたり、ネッダ(嘉目真木子)が不倫に走るの女優としてもっと売り出したいためと設定するなど、あれこれ趣向が多くて完成度はイマイチながら、ありきたりの舞台を作りたくないという演出家の気持ちは伝わってくる。一方、作品固有の歴史、地域、風土などはほとんど表現されないで、そこにこそ意義と愛着を感じる聴衆には不満もあったのではないか。パオロ・カリニャーニ指揮のもと、東京フィルハーモニー交響楽団が好演した。

《パルジファル》での驚きは、筆者にとってまず演出(クラウス・グート)が表現した問題提起の大胆さにあった。舞台上で行われている劇進行自体は具象的で決してわかりにくいものではないのだが、無知な若者パルジファル(福井敬)がさまざまなことを見聞し、体験して目覚めていった結果、到達したものは何だったのかを考えると、恐ろしいまでに奥が深い。ドイツの歴史に詳しい聴衆にはナチス台頭に至る経過が辿られていたと明確にわかったようで、さまざまな意味で実に勉強しがいのある作品であることが強烈に印象づけられた。長編のスコアを丹念に読み通した飯守泰次郎の指揮、粒ぞろいの歌唱陣、演劇的完成度の高さなど評価すべき面は多いが、最も大切なのは、この演出をどう評価するにせよ、そこでなされた問題提起をどう受け止めるかを個々の聴衆が自分の問題として検証することではないだろうか。

ニューウェーブ・オペラ劇場は研修所修生の出演で3年に1度のサイクルで開催され

ている企画。通常の修了公演とは一線を画する本格的なもので、ダブルキャストで2回公演しかない（一人の出番は一回のみ）のが惜しいほど。ラヴェルの《スペイン時間》と《子どもと魔法》がジェローム・カルタンバックの指揮、加藤直の演出で行われ、子ども役の澤村翔子、宮澤彩子ほか前途有望な若手歌手が多数出演した。なお、共同主催による《メデア》については次の日生劇場の項で。

■ 日生劇場

日生劇場は2013年に開場50周年を迎えるのを記念して一連の行事を企画、11月の《メデア》で50周年事業を本格的にスタートさせた。《メデア》は同劇場開場50周年記念〈特別公演〉であるとともに二期会創立60周年記念公演でもあり、読売日本交響楽団創立50周年記念事業とも銘打たれて、3団体の共同主催で開催された。戦後の半世紀を共に歩み、日本の音楽文化を育んできた3団体が、この上演困難な超現代オペラに真正面から取り組み、演奏能力を傾注することによって、日本初演の舞台を堅実に固めることができた。蛇足ながら、こうした前衛的現代オペラの公演は、やる意義は大きく、成功すれば専門筋の評価も得られる半面、券売の面では大きなリスクを伴いがちだ。しっかりした財政基盤があってこそ可能なことだったといわざるをえない。

《メデア》はグリルパルツァーの三部劇詩《金羊皮》の第3部〈メデア〉を原作に、作曲者ライマンが台本を作成。2010年、ウィーン国立歌劇場で初演された最新作である。メデアはギリシャ神話に登場する女性で、夫や子どもを含む周囲から過酷な迫害を受けて激しく怒り、魔力で復讐し、自分の子どもまで殺して去る。歌唱パートは台本がドイツ語とは思えないまでに極端にデフォルメされ、ヒ

コヒコ、コロコロと狂気のような旋律が続く。それによって人間の最も本質的な一面が流露し、感情が日常性を超えて飛翔する。歌唱技術だけをみても極めて高度のテクニックが要求されるものであり、東京二期会の実績ある歌手たちが精確に歌いこなした。その裏には個々人の大変な努力と声楽界全般の水準向上があり、その点だけでも大層見事な公演であったといわざるをえない。メデア（飯田みち代）は、怒りを爆発させつつも人物像はやや優しくなりがちだったが、これは緻密な表現に秀でた日本人歌手の特徴かもしれない。イヤソン（宮本益光）は人物像を的確にとらえ、憎まれ役に徹した潔さで秀逸。クレオサ（林美智子）、使者（彌勒忠史）らも好演した。大編成のオーケストラからは繊細かつ静謐な響きが引き出され、音楽面を手堅く探究した下野竜也の指揮を称えたい。

この年、開場50周年記念のもう一つのオペラとして《フィガロの結婚》が、一般公演2回と中・高生向けのオペラ教室が3回、行われた。歌手は若手中心で東京二期会のメンバーが多いとはいえ所属は幅広い。演出（菅尾友）も若手で、本格的なオペラ演出は初めて。いわば若手づくしの公演で、それが舞台に新鮮な活気をもたらししていた。ドールハウスのような舞台装置のなかで出演者が活発に動き回る。くんずほぐれつの激しいアクションや映像の同時進行など、現代演出では決して珍しい趣向ではないのだが、にもかかわらず舞台がごく新鮮に感じられたのは、風俗が今の日本を表現していたからではないか。菅尾はこれまで主にドイツで学び、ドラマの深め方がしっかりしている。今後の活躍が待たれる一人である。歌手ではスザンナ（新垣有希子）、ケルビーノ（堀万里絵）らの好演が特に光っていた。

■ 東京オペラ・プロデュース

埋もれた作品の日本初演を続けている東京オペラ・プロデュースは、この年もプロコフィエフ《修道院での結婚》とマスネ《エロディアド》の2作を日本初演した。1月の《修道院での結婚》は1946年初演の喜劇オペラで、風刺の効いた痛快なストーリーと、伝統的な書法のなかにも意表を突いた現代性が巧みに混ざり合った音楽が楽しい。若い娘（ルイーザ：大隅智佳子）と結婚したが成り上がり富豪（メンドーザ：佐藤泰弘）と娘の結婚で財産を得ようとする父親（ドン・ジェローム：石川誠二）を、若い恋人同士が策略をめぐらしてハッピーエンドにこぎつけるという、よくあるパターンの筋ではあるが、途中、酒とワイロに明け暮れる修道士たちや、混乱に乗じて富豪の妻の座に収まってしまう家政婦（ドゥエンナ：田辺いづみ）など、多様な人物模様が小気味よく描かれて飽きさせない。全員が適役とはいえず、ロシア語に堪能な歌手も少なかったようだが、そうした制約のなかでも全員がチャレンジ精神を発揮して堂々と歌ってみせた気概は立派。飯坂純の指揮、八木清市の演出とも舞台を堅実に固めていた。

6月の《エロディアド》(1881)はサロメの母をタイトルロールに、よく知られたR.シュトラウスの《サロメ》(1905)と人物設定はほぼ共通するが、人物像やストーリーは大きく異なり、一層複雑になっている。とはいえ事実上の主人公はやはりサロメ（大隅智佳子）で、ここでサロメは宮殿に奉公する奴隷であり、幼いころに別れた母親を探している。預言者ジャン（内山信吾）と愛し合っており、ジャンの処刑中止をエロデ王（秋山隆典）と王妃エロディアド（及川睦子）に求めるが、すでに処刑されていた。逆上したサロメは、王妃から自分が母だといわれ、絶

望して自害する。1884年に大幅改訂のうえパリで初演された全4幕版を原語（フランス語）で上演。抒情的な旋律が続き、バレエの出番も多いフランスオペラの異色作であった。マスネ没後100年記念公演。

■ オペラシアターこんにゃく座

前年に続く創立40周年記念公演第4弾として2月、萩京子作曲《金色夜叉》を再演した。台本の作者で1995年の初演時には演出も担当した山元清多（2010年9月没）の追悼公演でもある。山元とこんにゃく座との結びつきは深く、複数のレパートリーを演出したほか、台本は《ロミオとジュリエット・瓦礫のなかの》、《ピノッキオ》などを残している。《金色夜叉》は、初演時の印象深い複数のシーンが今でも鮮明に思い出されるほどだが、出演者が年齢を重ね、新しいメンバーも加わるなかで、表現の質が変わっているように感じられた。いわば体当たりで演じていた熱気から、より大人の味へと変わりつつあるのかもしれない。

9月には《森は生きている》の再演。こちらは同年1月に他界した作曲者林光の追悼公演である。同座の代表的演目の一つとして全国で繰り返し上演されている作品だが、大石哲史の新演出に変わり、フレッシュ路線での再出発となった。大石演出は子どもの感性に焦点を当て、カラフルで半ばマンガのような舞台。大人の視点をあえて混入させずとも、子ども向きに高い水準で作られたものなら大人の鑑賞にも十分耐えうることを実証。出演者全員の声が好調で、歌の魅力をアピールできたことも功を奏した。林光の遺業に支えられつつも、座として進むべき新たな道が照らしだされていた。

東京での一般公演はこれだけで、この年は同座には珍しく新作初演がなかった。全国巡

演は例年どおり年間を通して行われ、上記2演目のほか《ねこのくにのおきゃくさま》、《ピノッキオ》、《ネズミの涙》等が繰り返し上演された。

■ その他の団体など (東京)

(財)日本オペレッタ協会は財政事情により、年1回だけの公演態勢が続いている。この年はレパートリーのなかから《ローベルト・シュトルツの青春—二人の心はワルツを奏で—》を再演。オーストリアのオペレッタ作曲家ローベルト・シュトルツ(1880～1975)の半生を寺崎裕則の作・演出、シュトルツ自身の音楽で綴った作品で、初上演は1993年。宇佐美瑠璃、足立さつき、家田紀子ら特に女声陣がおおむねしっかりした日本語唱法で表現を深め、気迫ある舞台となった。

オペレッタ専門のグループ活動がいくつか行われているなかで、最近伸びているのが東京オペレッタ劇場だ。角岳史を音楽監督・指揮・演出に無理のない事業規模で水準の高い舞台を提供している。赤坂区民センター・区民ホールで歌手10人、器楽7人だけで《魔笛》を上演。角岳史が訳詞・台本にも手腕をふるい、短縮版ならではのスピーディな展開と喜劇タッチの軽いノリで楽しめる舞台を作っていた。小ホールのためもあるが日本語歌唱の良さが活かされ、歌手は実力を発揮。新人ではモノスタスの与儀巧が光っていた。

小劇場でユニークな活動をしているのは複数のオペレッタ団体のほか、シアターX^{カイ}も独自の路線で異彩を放っている。同劇場の創立20周年記念企画として新作オペラ《地獄変》が初演され、日本の多くの新作オペラにはなかなか見いだせない鋭い問題意識と刺激をもたらした。台本は芥川龍之介を原作に入市翔が作成、作曲はイスラエルのロネン・

シャピラ(1966～)で、「90%を平均律ではなく4分の1トーンを使って作曲」したと記されているように、ほぼ全編が微分音の世界。幻想的で意識にモヤがかかるような不思議な音感覚だ。終盤、娘(西野薫)が火あぶりにされる場面では、東京電力福島第1原子力発電所の事故あと(爆発した建屋の内部)の映像が大きく克明に延々と映しだされて、現代の「地獄」を強く表現した。演出・美術は井田邦明。作品そのものとしては、良秀(谷川佳幸)の人物像がいま一つ不鮮明に感じられたことなど、完成度は必ずしも高いとはいえない半面、今、日本のオペラ界で最も先鋭的な問題提起が可能なのはこの劇場を措いてないかもしれない。同劇場では恒例の「あえて、小さなオペラ」シリーズで《カヴァレリア・ルスティカーナ》、《魔笛》、「パフォーミングアーツ塾」公演で《ドン・ジョヴァンニ》、《奥様女中》も公演。プロフェッショナルなレベルを保ちつつ、全公演とも入場料が一律1,000円という破格の値段も隠れた人気を呼んでいる。

小劇場で開催されるオペラには、舞台上演とコンサート形式上演との混合形態ともいうべき演出が圧倒的に多い。こうした上演形態は中・大ホールにも見受けられ、ホール自体の形態を理由とするものだけでなく、最近では特に舞台費節減の関係で増えているようだ。それらのなかに、劇場本来のスタイルではなくとも新しい形の「オペラ」として創意に富んだ舞台を見せてくれるケースが少なくない。北とびあ国際音楽祭のシャルパンティエ《病は気から》はその見事な一例であった。「セミ・ステージ形式」と記された音楽付きコメディで、ステージ上に管弦楽(レ・ボレアード)と階段状の座席列。宮城聰のステージングにより、歌手、合唱団、俳優(5人)が所せましと動き回り、抱腹絶倒の音楽劇を繰り広げる。寺神戸亮の指揮で歌も演奏も高

水準。17世紀フランスの風刺を効かせた粋な喜劇オペラを存分に楽しむことができた。

(公財) サントリー芸術財団によるサマーフェスティバル25周年記念特別公演としてサントリーホールで上演されたクセナキス《オレスティア》は、あえてホールオペラとは銘うたず、ホールの形態を巧みに活かしたダイナミックな演出(カルルス・パドリッサが代表する舞台演出家集団ラ・フラ・デルス・バウス)によって舞台上演された。アイスキュロスのギリシャ悲劇を原作に、1960年代から1992年まで長い年月をかけて作曲されてきた作品で、完全版の舞台上演としては日本初。古いギリシャ語の歌詞を歌う旋律は4分の1音や3分の1音といった微分音でごく精密に構成されており、歌いこなすのは極度に困難と思われるが、ただ一人の歌手(松平敬)が一人二役でファルセットとバリトンを即座に歌い分ける見事さは圧倒的。合唱(東京混声合唱団)、児童合唱(東京少年少女合唱隊)も素晴らしく、東京シンフォニエッタほかの演奏とあわせて大変上質の演奏となった。指揮は山田和樹。演出は放射線防護服など現在日本の問題を何食わぬ顔で採り入れ、レーザー光線の使用や文字を空間に散らすなど、舞台表現の新しいテクノロジーを積極的に活用。現代オペラの最先端を行く奇抜な一夜となった。

このほか東京での公演で筆者が特に注目したものあげると、まず大田区民オペラ協議会の《トゥーランドット》。タイトルロールを下原千恵子と丸山恵美子がダブルで組み、他の配役も大半が有力な歌手で占められて、作品にふさわしい十分な声の力で圧倒的な迫力をもたらした。指揮の菊池彦典、管弦楽(プロムジカリナシェンテ)の力量も大きく貢献。演出(今井伸昭)はスコアをきちんと読み込んだ正統路線のドラマ作りが光る。筆者の観劇した日、ピン(今井俊輔)、パン(渡

辺大)、ボン(新海康仁)の3人組が歌はもちろん喜劇的演技をめったにないほど楽しくみせたのも収穫の一つだった。

《トゥーランドット》にはもう一つの注目公演がある。立川市民オペラの第6回公演で、こちらもタイトルロールに小川里美と津山恵がダブルで組んだほか、若手を含めた首都圏の実力派が出演して水準を保った。合唱や管弦楽には市民を含めて地元の音大生らも参加、古谷誠一の指揮、中村敬一演出によりしっかりしたレベルの市民オペラとなった。立川市民オペラでは、ピアノと小編成器楽アンサンブルによる《カヴァレリア・ルスティカーナ》公演なども行っている。

錦織健プロデュース・オペラ vol.5 《セビリアの理髪師》が東京など各都市を巡演し、全12回の公演をした。錦織(伯爵)、森麻季(ロジーナ)、堀内康雄(フィガロ)ら有力な歌手をそろえ、ごく基本的な演出(十川稔)でビギナーにもわかりやすい舞台。この企画は2002年にスタート、ほぼ隔年に開催されて10年目を迎えた。巡業型のオペラとして、海外団体では味わえない日本人のオペラならではの親近感を多くの観客に与えたに違いない。

国立オペラカンパニー 青いサカナ団は神田慶一台本・作曲《終わらない夏の王国》を再演した。2009年、金沢でジュニアオペラとして初演された際は約70人の子どもたちがにぎやかに出演したが、再演に当たり台本段階からかなりの改訂がなされてよりコンパクトになった。一人親家庭や孤食など、現代の子どもの問題を描く問題意識と着想は評価できる半面、改訂稿ならばこそ、台本の言葉の選び方や作曲などには一層の技量がほしかった。

オペラサロントナカイはサロンオペラとして《秘密の結婚》と《こうもり》を一部抜粋で上演したほか、ほぼ年間を通して若手歌手

による歌のステージを開催、オペラの特集なども行った。なお、活動の本拠として長く使われてきた音楽レストラン「オペラサロントナカイ」は耐震の関係で2012年12月末に閉店となり、2013年4月からは他の会場（浜松町のイタリアンレストラン「サン・ミケーレ」）を定期的に借りて活動を継続している。

■ 神奈川

横浜市内の各公共ホールでオペラ活動が発行された。神奈川県民ホールではびわ湖ホール、東京二期会ほかとの共同制作による《タンホイザー》を堂々上演。米国サンディエゴ・オペラの舞台装置・映像を借り、その関係で演出にはミヒャエル・ハンベが起用された。舞台全体が黄色味を帯びたセピア色にくすぶるなか、スコアに記されたオリジナルの指定が丹念に再現された。その古典絵画のように物語性に富んだ舞台は、聴衆を歴史の世界に連れ戻すことで作品本来の理解を促すものだった。現代的読み替え演出が優勢な昨今、こうした古典的スタイルに違和感を抱く向きもあったようだが、筆者にはこれまでに観たハンベ演出のなかで最も評価したいものとなった。歌手、オーケストラ（神奈川フィルハーモニー管弦楽団）、合唱（びわ湖ホール声楽アンサンブル、二期会合唱団）とも立派な取り組みだったなかで、唯一気になったのは合唱が微妙に遅れる場面があったこと（2日目）。これは副指揮の問題か。指揮は沼尻竜典。

神奈川県民ホールはまた小ホールでの自主制作として、一柳慧作曲のオペラ《ハーメルンの笛吹き男》を初演した。地域の子どもたち（赤い靴スタジオ）を交えてセリフで進む部分も多いファミリーオペラだが、音楽面には男性ソプラノ歌手（岡本知高）を主役の笛吹き男に据えるといった非凡な趣向があり、

さらに意表を突いたのは、テーマを「遊び」と設定し、子どもらしさの復権を通して最後は人々が和解するという、グリムの原作とは大幅に異なる夢のようなハッピーエンドであった。国際関係の悪化や政治的宗教的暴動が激化しているなかで、和解することの喜びが表現された舞台は示唆的だった。

県民ホールと地元の民間団体との共同主催が二つ。首都オペラによる《カルメン》はタイトルロールの小林由佳、ミカエラの山口佳子らの中軸に、特に後半で健闘した。横浜シティオペラの《ドン・ジョヴァンニ》でもドンナ・エルヴィラの和泉万里子、ドンナ・アナの弓田真理子、ツェルリーナの飯田千夏など主に女声陣がきちんと固め、男声では当日不調だったタイトルロール（清水宏樹）に代わってレボレッロの柴山昌宣がベテランの味で水準を確保した。両団体とも首都圏の利点を生かせば歌唱のレベルアップを一層図ることはさほど困難とも思えないのだが。

横浜シティオペラは関内ホールとの共催で《ヘンゼルとグレーテル》も公演。ピアノとパーカッションによる簡易編成版の日本語上演で、子どもの合唱、バレエ、演技などを大々的に加えてにぎやかな舞台を作った。関内ホールではこのほか「親子オペラワークショップ」を経て「90分でわかるオペラ モーツァルト《魔笛》」公演も行うなど、子どもオペラに積極的に取り組んでいる。

みなとみらいホールでは池辺晋一郎館長のもと、大ホールで《蝶々夫人》を独自スタイルのコンサート形式で上演。蝶々さん（山崎美奈）、ピンカートン（カルロ・バリチェリ）、シャープレス（堀内康雄）ほか内外の有力な歌手を配し、沼尻竜典指揮で音楽重視の路線をとった。加えて小ホールで《死神》、《ヘンゼルとグレーテル》、レセプションルームで《スザンナの秘密》など、無理のない形態でのオペラ公演を継続した。

KAAT 神奈川芸術劇場のオペラへの切り込みはより先鋭的だ。宮本亜門の構成・演出でネオ・オペラ《マダムバタフライX》と題して、舞台はオペラ映画《蝶々夫人》の撮影現場(演劇)。女性プロデューサー(内田淳子)が主役の一人になっていて、離婚調停中の自分の状況が、劇中劇として上演されるオペラ《蝶々夫人》の世界に激しく揺さぶりをかけられる。その間、現代日本でオペラ制作が置かれている状況なども挿入。スポンサーが降りるとか、オペラの良さを知る人と知らない人との落差の大きさなど、普段オペラに携わっている人々には身につまされる事象が描かれる。オペラ自体には省略とアレンジがあり、原曲とはかなり異なるが、蝶々さん(嘉目真木子)の最後のアリア歌唱が大変すばらしかったのが大きな収穫だ。子ども(池袋遥輝)が母を求める演技も強調され、そうしたオペラを観ることでプロデューサーとその息子の母子関係も再構築されることを予測させて全幕が終わった。《蝶々夫人》を現代の母子関係という視点で読み直したオペラ入り演劇といったもので、オペラに対峙する演出家の意識の鋭さに啓発されるところがあった。

■ 埼玉、千葉

NPO 法人オペラ彩(理事長: 和田タカ子)は埼玉県和光市を地盤に、広く首都圏の人材を起用して水準向上を図ってきた。2012年は1月にチレア《アドリアーナ・ルクヴルール》、12月にドニゼッティ《マリア・ストゥアルダ》と高度の歌唱力が要求される2演目を上演。合唱はアマチュアだが、歌手、オーケストラ、各種スタッフとも有力な専門家を配して、都内トップレベルの団体にも匹敵するほどにプロフェッショナルな舞台を提供した。なかでも歌唱困難ゆえめったに上演されない《マリア・ストゥアルダ》は圧巻。制作

陣、出演者、スタッフらが一体となって並々ならぬ向上心と気概のほどを示し、持てる力を存分に発揮して崇高なまでに感動的な最終場面へと導いた。特に出口正子(マリア・ストゥアルダ)、永井和子(エリザベッタ)、小堀勇介(ロベルト)ら歌手の健闘がめざましく、ヴィート・クレメンテの指揮、管弦楽(アンサンブル彩)も好演した。

市川オペラ振興会(理事長: 木村珠美)はガラ・コンサートとあわせて《道化師》を上演し、活動を継続した。1980年の設立から32年、これまでの実績には見事なものがある一方、状況が変わり世代交代の時期にも差しかかっているなか、今後の路線がやや気にかかる。

■ 長野

小澤征爾は手術後の体力回復に集中するため指揮活動を1年間休止すると発表、この年は総監督などの立場は続けたが、オペラの指揮は行わなかった。サイトウ・キネン・フェスティバル松本ではオネゲルの《火刑台上のジャンヌ・ダルク》を山田和樹指揮で上演。管弦楽(サイトウ・キネン・オーケストラ)を舞台上に置いてやや沈め、それを演技空間が回廊のように四角く囲む。大人の合唱(SKF松本合唱団、栗友会合唱団)はひな壇に固定と、コンサートオペラ形式にも近い上演形態だが、演出(コム・ドゥ・ベルシーズ)はこの舞台によって作品の特性を最高に深めて、大きな劇的効果を得た。多様な楽器を用いた管弦楽が美しく夢幻的な響きでジャンヌ(イザベル・カラヤン)の心を照らし出し、崇高な雰囲気で感動を高めた。地元の子どもたち(SKF松本児童合唱団)が見事な合唱で参加したことも特筆したい。

松本では市民オペラも発足しており、第3回公演《魔笛》がまつもと市民オペラ実行委

員会主催、まつもと市民芸術館共催により主ホールで開催された。歌手には天羽明恵（パミーナ）、針生美智子（夜の女王）、望月哲也（タミーノ）、太田直樹（パパゲーノ）ほか中央のトップクラス中心に配し、合唱は市民。音楽面の充実と独創的な演出（白井晃）により、画期的な公演となった。

（小澤征爾音楽塾オペラ・プロジェクトⅪとして準備が進められていた《蝶々夫人》は、小澤の指揮降板により全4公演が中止となったが、「塾」の主目的であるレッスンとリハーサルはピエール・ヴァレーらを中心に継続され、最終的に関係者・プレス向け公開公演が東京で1回行われた。なお、カヴァーキャストストラによる特別演奏会は予定どおり行われたが、指揮はユー・ルーが一時帰国中の交通事故により来日不能となったため、十束尚宏に変更された。）

■ 愛知、岐阜

（公財）愛知県文化振興事業団は愛知芸術文化センター開館20周年と同事業団創立20周年記念としてプロデュースオペラ《ランメルモールのルチア》を公演した。指揮はマッシモ・ザネッティ、合唱（AC合唱団）と管弦楽（名古屋フィルハーモニー交響楽団）に地元から出演したほか、歌手は東京と関西勢。ルチアにかけては国内随一の実績を誇る佐藤美枝子は特に第2幕以降で健闘、好調のエドガルド（村上敏明）とともに両家の和解を願う愛の悲劇を歌い上げた。日本オペラ振興会提供の装置（演出：岩田達宗）は鋭角的なパネルで悲劇的雰囲気強調するものだが、舞台や劇場の広さをやや持て余し気味。これだけ大きい劇場（2500席）であってみれば、一層スケールの大きい表現力が望まれたのではない。

同事業団はこのほか演奏会形式による《マ

クベス》をコンサートホールで上演。低音が抜群によく響き、途中で殺されてしまうのが惜しいほどのバンクォー（ジョン・ハオ）をはじめ、マクベス（堀内康雄）、マクベス夫人（田口智子）ほか力のある歌手がそろって見事な演奏となった。

名古屋二期会は名古屋市民会館開館40周年記念として《フィガロの結婚》を上演した。概して何人かの女声が歌唱をしっかりとこなしている一方、男声には人材不足が目立つ。とはいえ名古屋地域全体をみれば室内オペラや小ホールでのグループ活動はかなり活発に行われているようだし、各音楽大学でのオペラへの取り組みにも本格的なものがある。いずれ人材が育ってくることを期待しよう。

岐阜県揖斐川町で町芸術祭「アートいびがわ2012」の一環として《夜叉ヶ池 八丈岩物語》（作曲：森三恵子）が再演された。同町ではこうした町民参加のオペレッタ活動が24年前から継続されており、見事に定着した感がある。

■ 広島、香川、徳島、鹿児島、熊本

ひろしまオペラ・音楽推進委員会ほかの主催による「ひろしまオペラルネッサンス」として、《魔笛》が上演された。同地区中心にキャストをオーディションで集め、粒ぞろいとはいかないものの一応の水準で固めている。歌唱は原語だがセリフは日本語で、しかもかなり量が多い。岩田達宗演出のもと、装置がほとんどなく森の動物たちも子どもたちも登場しないシンプルな舞台で、歌手たちがよく動き、演技を克明にこなして、作中人物の葛藤や人間ドラマをシビアに表現した。合唱（ひろしまオペラルネッサンス合唱団）、管弦楽（広島交響楽団）を含め、20年におよぶ公的オペラ事業により、地域に人材と聴衆が育っていることが実感された。

同委員会はまた細川俊夫のオペラ《班女》をアステールプラザ中ホール能舞台上で上演。地域を超えて大きく注目されたなかで、特に藤井美雪（実子）の好演が評判を呼んだ。さらに松下功作曲《遣唐使〜阿倍仲麻呂〜》を大ホールで上演。地域のオペラ団体との共同主催では、広島オペラアンサンブルの《花言葉》、Hios（ひろしま国際オペラスタジオ）の《カルメン》などが開催され、なかなか活発なオペラ活動であった。

高松市を中心に活動をしている四国二期会が地域の人材を結集して《秘密の結婚》を上演、基本ラインをきちんと押さえた正統派路線に期待が持てる。徳島市では地元の伝統芸術、人形浄瑠璃を採り入れたオペラ公演が二つ行われた。一つはNPO法人オペラ徳島の設立15周年記念公演で第27回国民文化祭・とくしま2012国文祭成果継承事業として《蝶々夫人》を公演。松本憲治の演出で阿波人形浄瑠璃平成座が特別出演、関西や広島などから集まった歌手、地元の合唱団、管弦楽団と共演した。もう一つは（財）徳島県文化振興財団の主催によりあわぎんホールで開催された三木稔作曲《じょうり》。人形浄瑠璃の一座を率いる太夫を主人公にした作品で、人形遣いに青年座が特別出演した。

鹿児島オペラ協会は創立40周年記念公演として代表的レパートリーの《ミスター・シンデレラ》を再演した。地元を舞台にしたオリジナル作品で方言、民謡、地域の風俗や地名などがふんだんに入った喜劇オペラを、現地の観客が楽しんでた。

熊本では、熊本オペラ芸術協会が創立30年記念として出田敬三作曲《細川ガラシア》を「創立30年記念公演版」で上演、細川ガラシア生誕450年記念でもある。熊本シティ・オペラ協会は沖縄オペラ協会との親善公演として《リゴレット》、NPO法人テアトロ・リリカ熊本は15周年記念として《トス

カ》をそれぞれ上演した。

■ 宮城、福島、岩手、北海道

仙台オペラ協会は1月、仙台市青年文化センター・シアターホールで《愛の妙薬》、9月には再開した東京エレクトロンホール宮城（宮城県民会館）で《ドン・ジョヴァンニ》と、年内2公演を開催した。前2011年に新国立劇場で《鳴砂》公演を行った関係で、地元での公演は年度内の翌1月に持ち越されたため。《愛の妙薬》は仙台を本拠とする演出家・渡部三妙子により喜劇的要素が強調されて思い切り明るく作られていた。中規模ホールのため歌手にも負担が少なく、ダンスで参加した地域の子どもたちが弾けるように元気な舞台姿をみせたことも手伝って、充実感のある舞台となった。こうした明るさこそ、震災を経て間もない同地で多くの人々に求められているものだったに違いない。《ドン・ジョヴァンニ》は再び大ホールに戻り、歌唱力には出演者間で差がある一方、震災後の高揚した気分もやや収まって通常のペースに戻りつつあることを感じさせた。

仙台市内は復興景気とされるにぎわいで、オペラ公演はこのほか震災復興プロジェクトの《夕鶴》（東北大学長陵同窓会主催、演奏会形式）、文化庁「次代を担う子どもの文化芸術体験事業」藤原歌劇団公演やオペラシアターこんにゃく座の巡回公演などが複数回開催されている。やる側も観る側も、精神的なゆとりがあるなかでオペラを優雅に楽しんだのではなく、悲しみや不安感などを大きく抱えながらの芸術体験だったに違いない。

福島では2011年に予定していた震災で延期になった福島オペラ協会設立15周年記念公演《蝶々夫人》が震災復興祈念事業として2月に開催。7月には会津若松市で数年前から計画されていたオペラ《白虎》が、震

災によって中止されることなく、福島—Fukushima—復興・復活オペラプロジェクトとして無事初演された。今日の視点から白虎隊にまつわる逸話をとらえ(台本: 宮本益光)、作曲(加藤昌則)では専門家の技量とアマチュアの参加を巧みに結合させている。主催は地元の地域振興芸術委員会で地域の参加、協賛、協力をとりつけ、同市出身の佐藤正浩を指揮に東京二期会から有力な歌手を招いて水準の高い公演となった。

岩手県では盛岡市でやはり震災で延期になっていた第2回岩手県民オペラ《魔法の笛》が5月、同県文化振興事業団の主催で開催された。延期によって複数の主要メンバーが降板するなど人材不足の公演だったとはいえ、オペラが普及しているとはいえない地区での開拓者精神を称えたい。奥州市でも8月、同市文化会館20周年記念事業として《椿姫》を上演している。

札幌市芸術文化財団などが主催する「さっぽろオペラ祭2012」には札幌室内歌劇場《唱歌の学校》、北海道二期会《こうもり》、札幌オペラスタジオ《ヘンゼルとグレーテル》が参加し、それぞれの路線で健闘した。このうち北海道二期会は2年後に50周年を控えて意欲が高まっており、筆者が観劇した日(10月6日)にはこれまでの同会のイメージを大きく塗り替えるほど歌唱力全般に向上がみられた。